

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録解析

科学的根拠に基づくがん検診の受診は、がんの早期発見・早期治療につながることから、がんの死亡者をさらに減少していくためには、がん検診の受診率向上が必要不可欠である。しかしながら、令和4（2022）年の国民生活基礎調査によると福岡県のがん検診受診率はいずれの検診においても、全国平均を下回っている。（第4期福岡県がん対策推進計画より抜粋）

福岡県がん診療連携協議会 がん登録専門部会では、令和2年度に県民のがん検診受診率向上を目的に、5大癌・子宮頸部癌・前立腺癌について、発見経緯別集計、5年生存率等の解析を行いその結果を公表した。今回の結果でも殆どのがんにおいて、がん検診で発見された場合の死亡率が明らかに低い結果となった。今後も経時的に解析を行うことで、福岡県のがん検診受診率向上の一助となれば幸いである。

【対象年】 院内がん登録データ 2015-2017年症例

【がん種】 胃・大腸・肝・肺・乳腺・子宮頸部・前立腺

【症例区分】 自施設診断・自施設初回治療開始、他施設診断・自施設初回治療開始

【臨床病期】 不明を除く

【組織型コード】 8000-8005、8010-8015、8020-8022、8030-8046、8050、8051-8084、8090-8110、8120-8131、8140-8149、8150-8157、8160-8162、8170-8180、8190-8221、8230-8231、8246-8247、8250-8255、8260-8337、8340-8347、8350-8551、8560-8562、8570-8576、8580-8671、8940-8941 ※前立腺は、8120-8131を除く

◎対象とする組織型は、国立がん研究センターの報告書に準拠した

【追跡期間】 ① 死亡例の場合は、死亡日の年月、生存例の場合は、生存最終確認日の年月）が不明の場合は集計対象からは除外

② 死亡例で死亡日の年月が不明であっても、生存最終確認日の年月が判明している場合は、生存最終確認日を追跡終了日として、打ち切り例として集計

《対象年別部位別データ数》

対象年	胃	大腸	肝	肺	乳腺	子宮頸部	前立腺	計
2015年	2,384	2,636	938	2,697	2,234	1,069	1,350	13,308
2016年	2,311	2,624	984	2,870	2,489	1,173	1,367	13,818
2017年	2,352	2,650	904	3,007	2,640	1,177	1,317	14,047
計	7,047	7,910	2,826	8,574	7,363	3,419	4,034	41,173

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【胃】

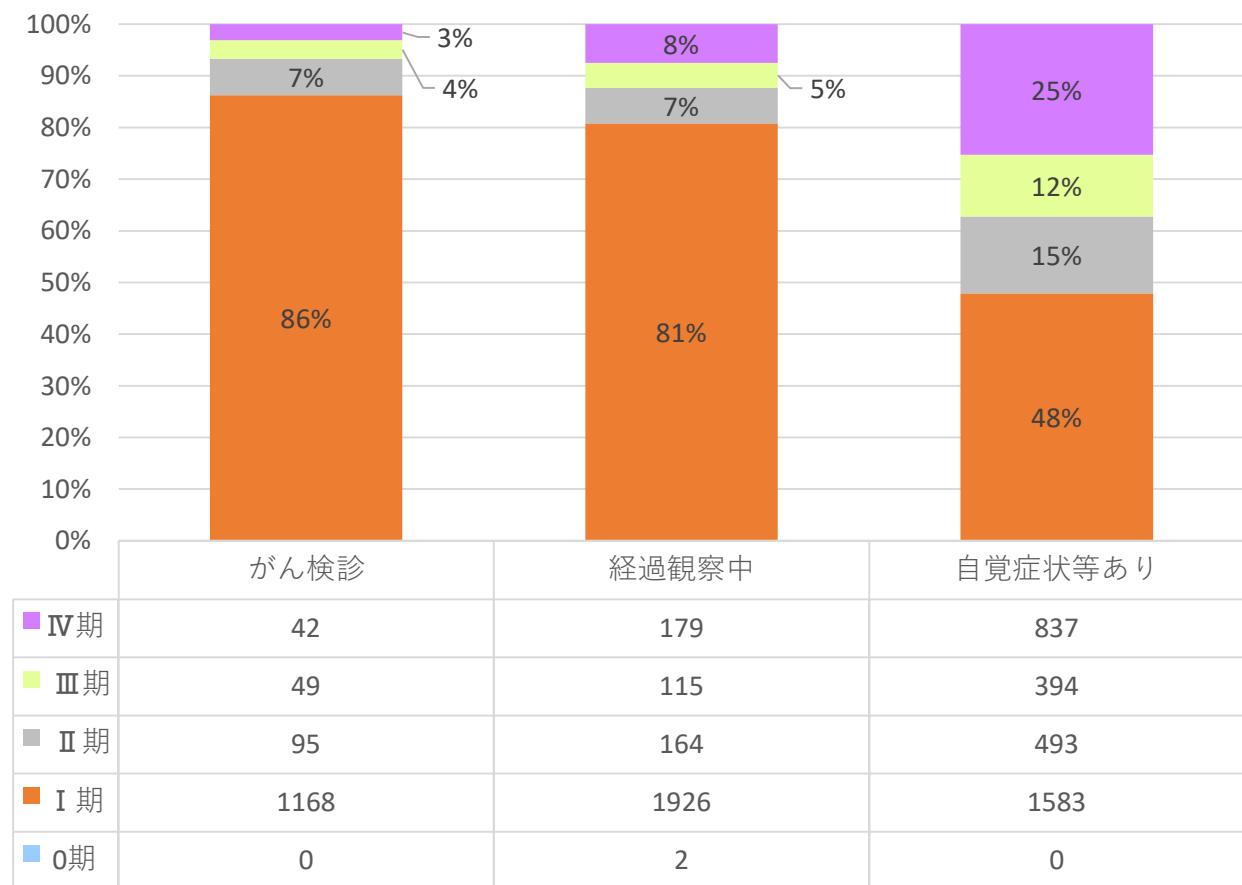
◎検診でみつける胃がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	0	1,168	95	49	42	1,354
経過観察中	2	1,926	164	115	179	2,386
自覚症状等あり	0	1,583	493	394	837	3,307
総計	2	4,677	752	558	1,058	7,047

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、胃がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態で見つかった症例

自覚症状等あり・・・食欲不振や吐き気、黒色便等自覚症状が有り、がんが見つかった症例

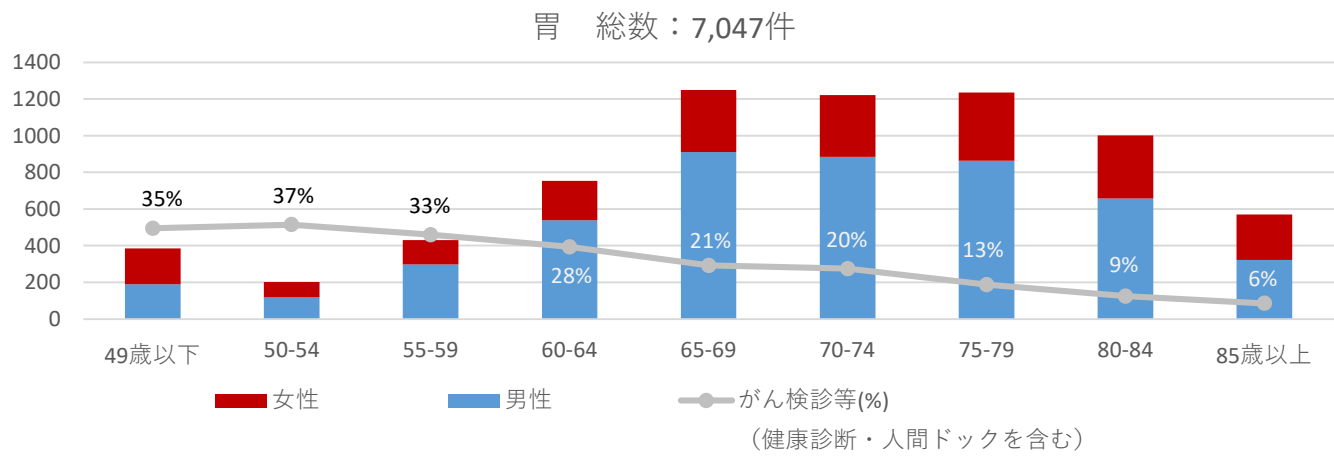


【解説】

3年間の対象症例数は7,047件で、がん検診での発見数は1,354件（19%）、経過観察中での発見数は2,386件（34%）、自覚症状等ありでの発見数は最も多く3,307件（47%）であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期I期が86%で、IV期が3%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期I期が48%で、IV期が25%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎胃がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



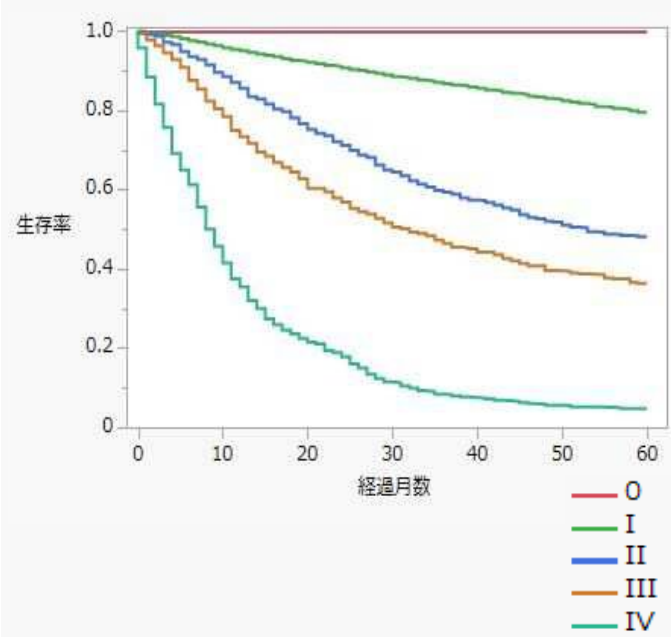
【解説】

発生数は、男性が4,783人、女性が2,264人と男性が女性の2倍も多い。グラフを見ると、発生数は年齢階層では60歳代後半から急速に増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代前半の37%をピークに減少し、70歳代前半からは20%以下となり発生数の増加と反対に減少している。

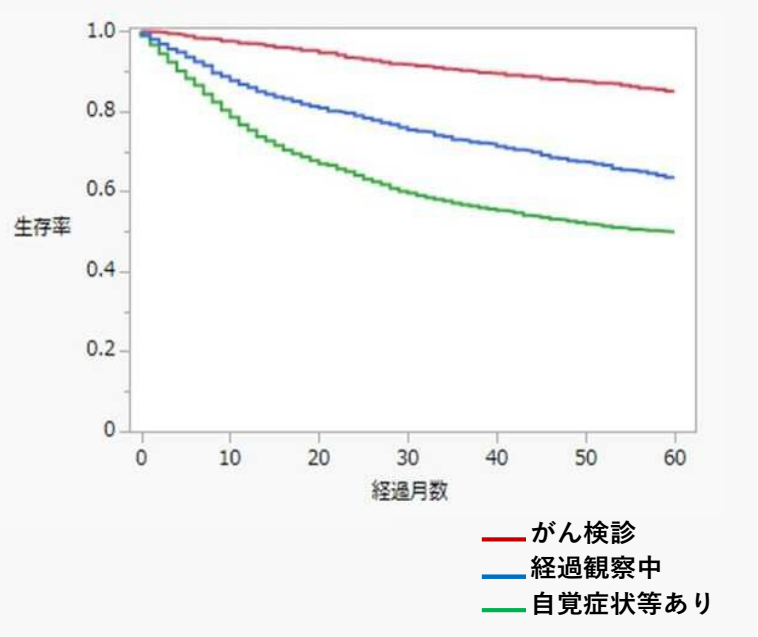
◎5年生存率 【集計対象数】

	0	I	II	III	IV	合計
がん検診		966	82	44	37	1,129
経過観察中	1	1,587	133	99	145	1,965
自覚症状等あり		1,331	410	316	734	2,791
合計	1	3,884	625	459	916	5,885

[臨床病期別]



[発見経緯別]



【解説】

胃がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合の生存率は約88%と明らかに高く、自覚症状等ありの場合の生存率は約50%という結果であった。

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【大腸】

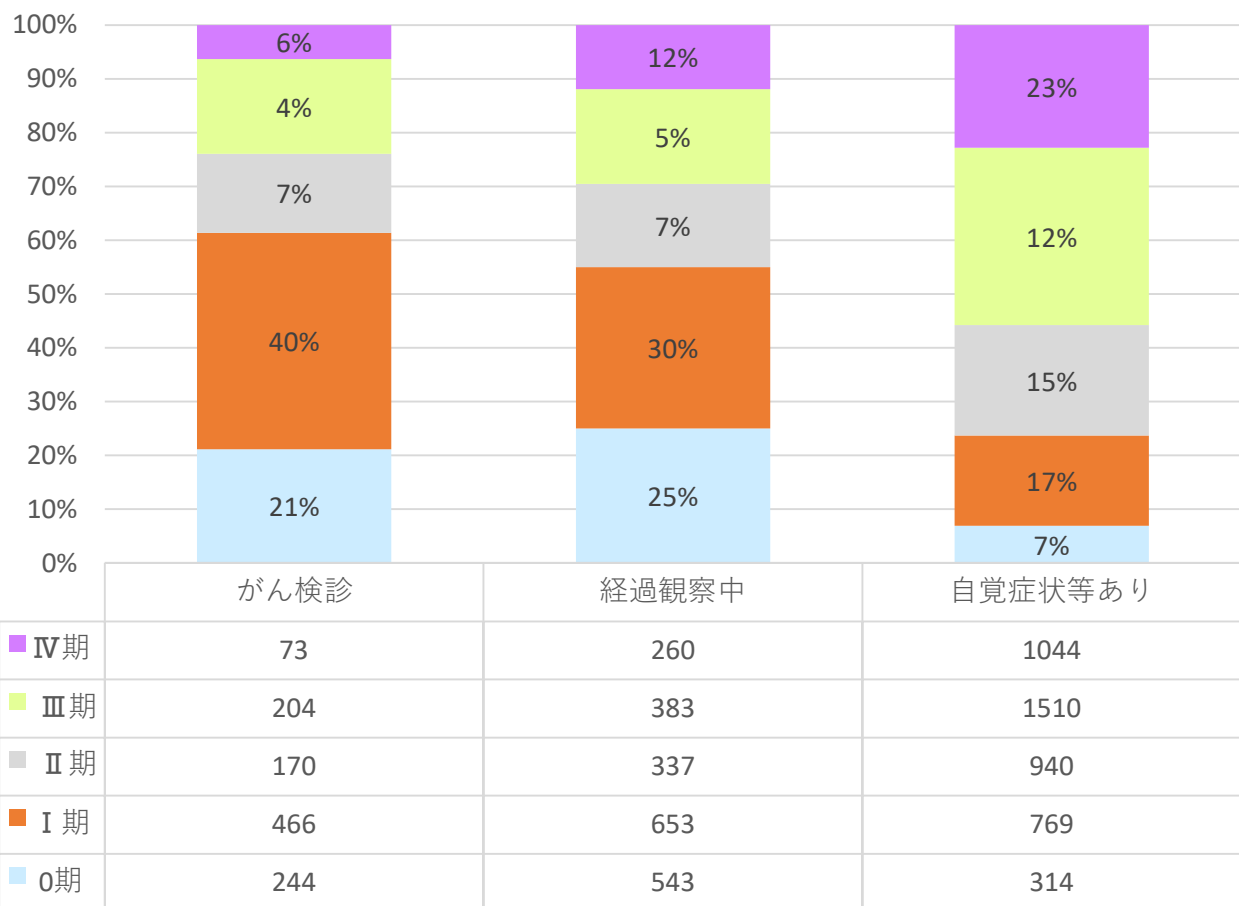
◎検診でみつける大腸がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	244	466	170	204	73	1,157
経過観察中	543	653	337	383	260	2,176
自覚症状等あり	314	769	940	1,510	1,044	4,577
総計	1,101	1,888	1,447	2,097	1,377	7,910

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、大腸がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例

自覚症状等あり・・・血便や下血、腹痛等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例

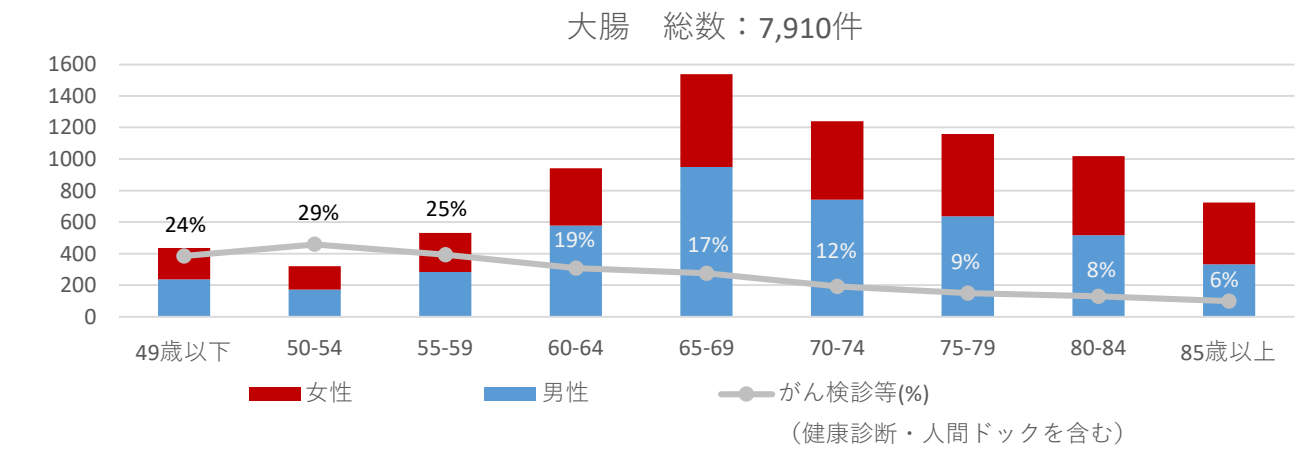


【解説】

3年間の対象症例数は7,910件で、がん検診での発見数は1,157件（15%）、経過観察中は2,176件（28%）、自覚症状等ありでの発見数は最も多く4,577件（58%）であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期0期・I期で61%、IV期が6%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期0期・I期で24%、IV期が23%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎大腸がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



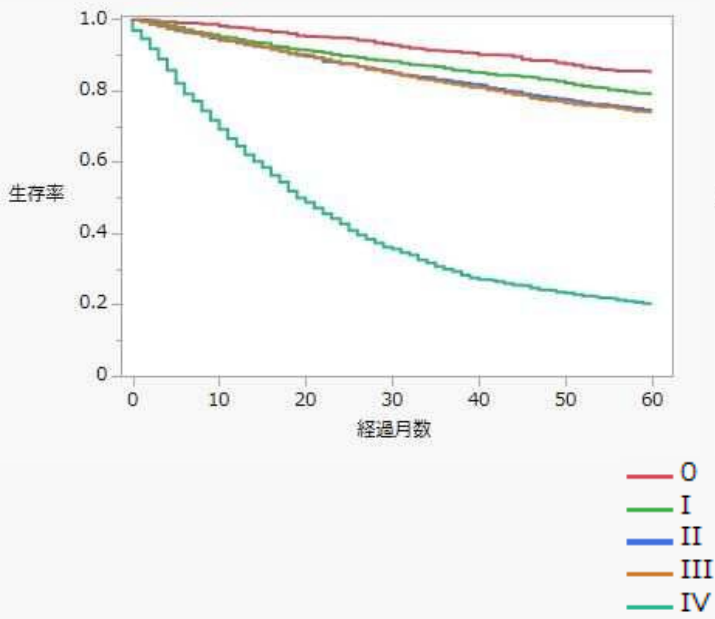
【解説】

発生数は、男性が4,445人、女性が3,465人と男性が女性の1.3倍多い。グラフを見ると、年齢階層では60歳代前半から明らかに増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代前半の29%がピークとなっており、年齢の上昇とともに、徐々に減少している。

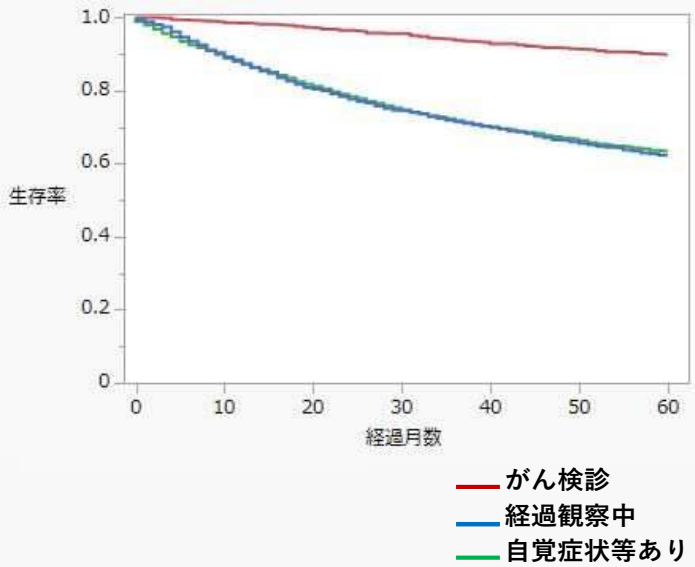
◎5年生存率 【集計対象数】

	0	I	II	III	IV	合計
がん検診	185	375	137	172	64	933
経過観察中	366	523	275	310	210	1,684
自覚症状等あり	230	624	742	1262	869	3,727
合計	781	1,522	1,154	1,744	1,143	6,344

[臨床病期別]



[発見経緯別]



【解説】

大腸がんの5年生存率をみると、0期・Ⅰ期とⅡ期・Ⅲ期の差は比較的小さい。発見経緯別では、がん検診で発見された場合、約90%と明らかに生存率が高く、経過観察中と自覚症状等ありの2つのグループの生存率は約65%程度という結果であった。

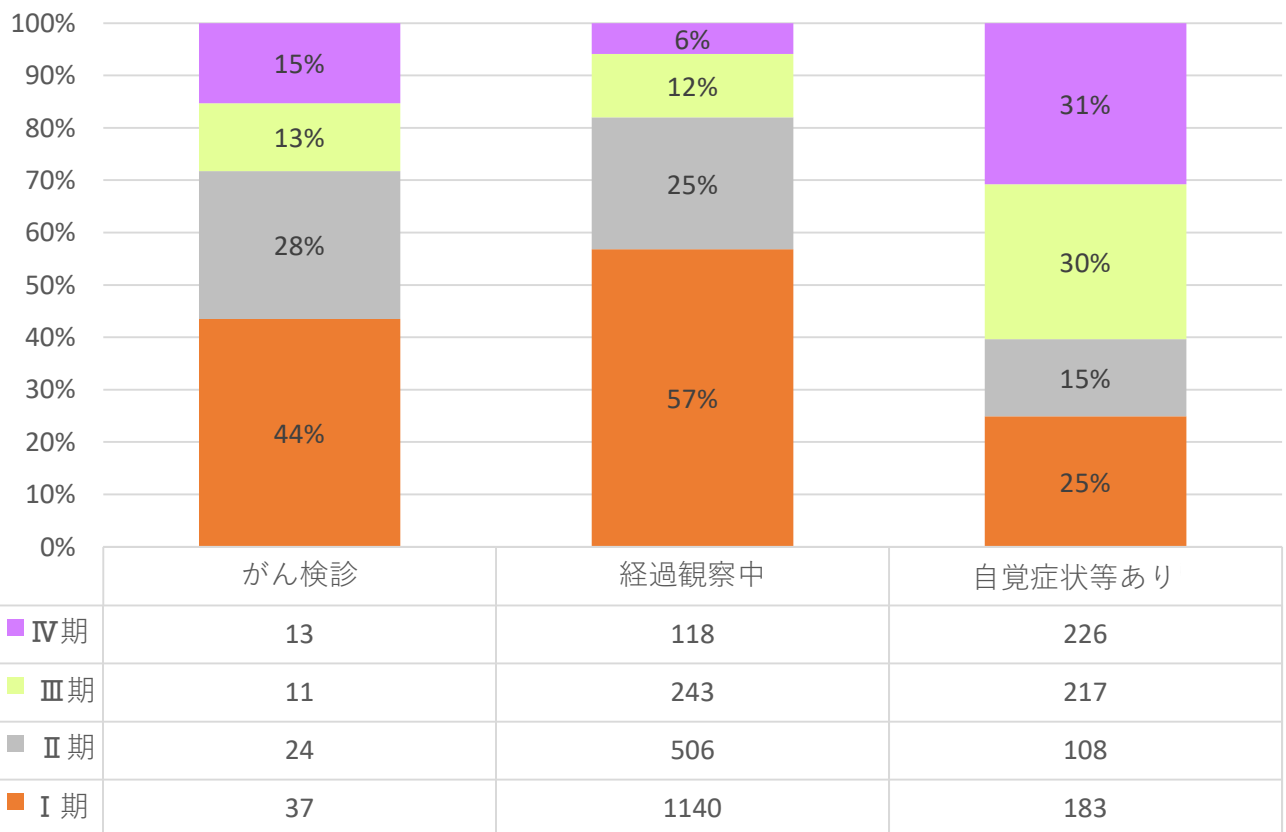
福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【肝臓】

◎検診でみつける肝臓がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	37	24	11	13	85
経過観察中	1,140	506	243	118	2,007
自覚症状等あり	183	108	217	226	734
総計	1,360	638	471	357	2,826

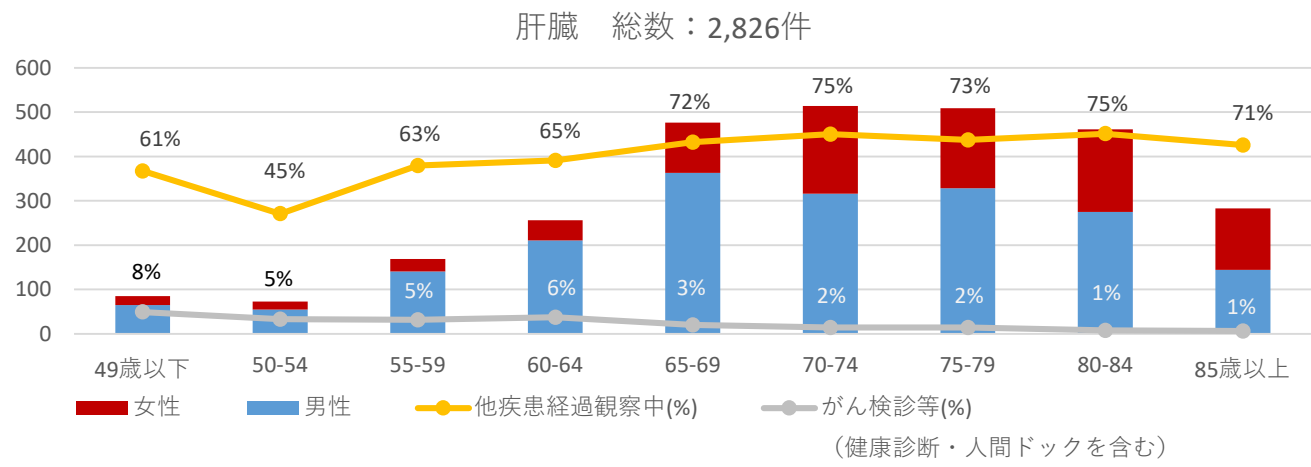
- ※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、肝臓がんが検診で見つかった症例
経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例
自覚症状等あり・・・腹部の圧迫感や痛み等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は2,826件で、がん検診での発見数は85件（3%）と低く、経過観察中での発見数は最も多く2,007件（71%）、自覚症状等ありでの発見数は734件（26%）であった。経過観察中に発見された場合、臨床病期Ⅰ期が57%で、Ⅳ期が6%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期Ⅰ期が25%、Ⅳ期が31%であり、経過観察中で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎肝臓がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



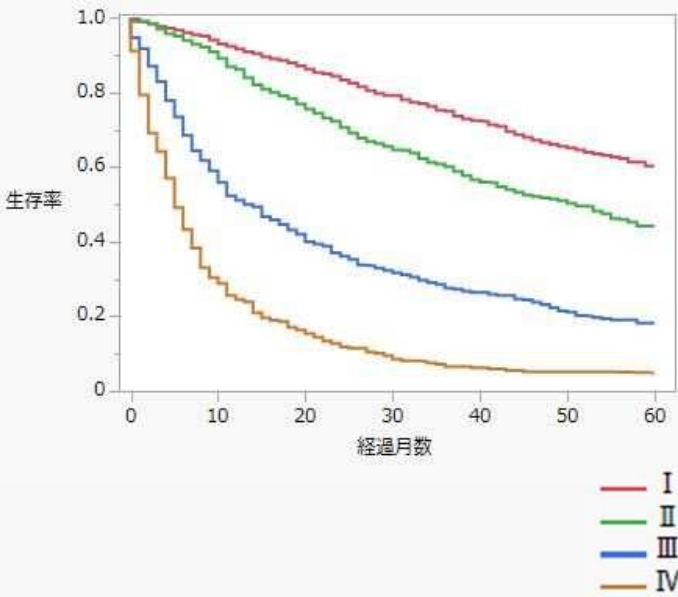
【解説】

発生数は、男性が1,898人、女性が928人と男性が女性の2倍も多い。グラフを見ると、年齢階層では60歳代後半から80歳代前半までが多い。一方、がん検診による発見率は全年代で低いが、他疾患経過観察による発見率は、50歳代前半を除くすべての階層で61%から75%と高い水準で推移している。

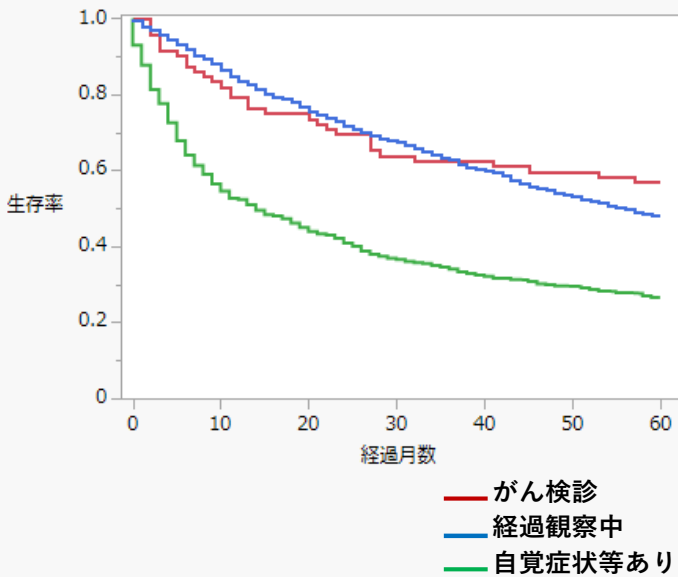
◎5年生存率 【集計対象数】

	I	II	III	IV	合計
がん検診	29	22	9	12	72
経過観察中	919	440	178	96	1,633
自覚症状等あり	154	90	153	197	594
合計	1,102	552	340	305	2,299

[臨床病期別]



[発見経緯別]



【解説】

肝がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別にみると、がん検診で見つかった場合は約58%、経過観察中で発見された場合は約50%、自覚症状等ありの場合は約30%の結果であった。

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【肺】

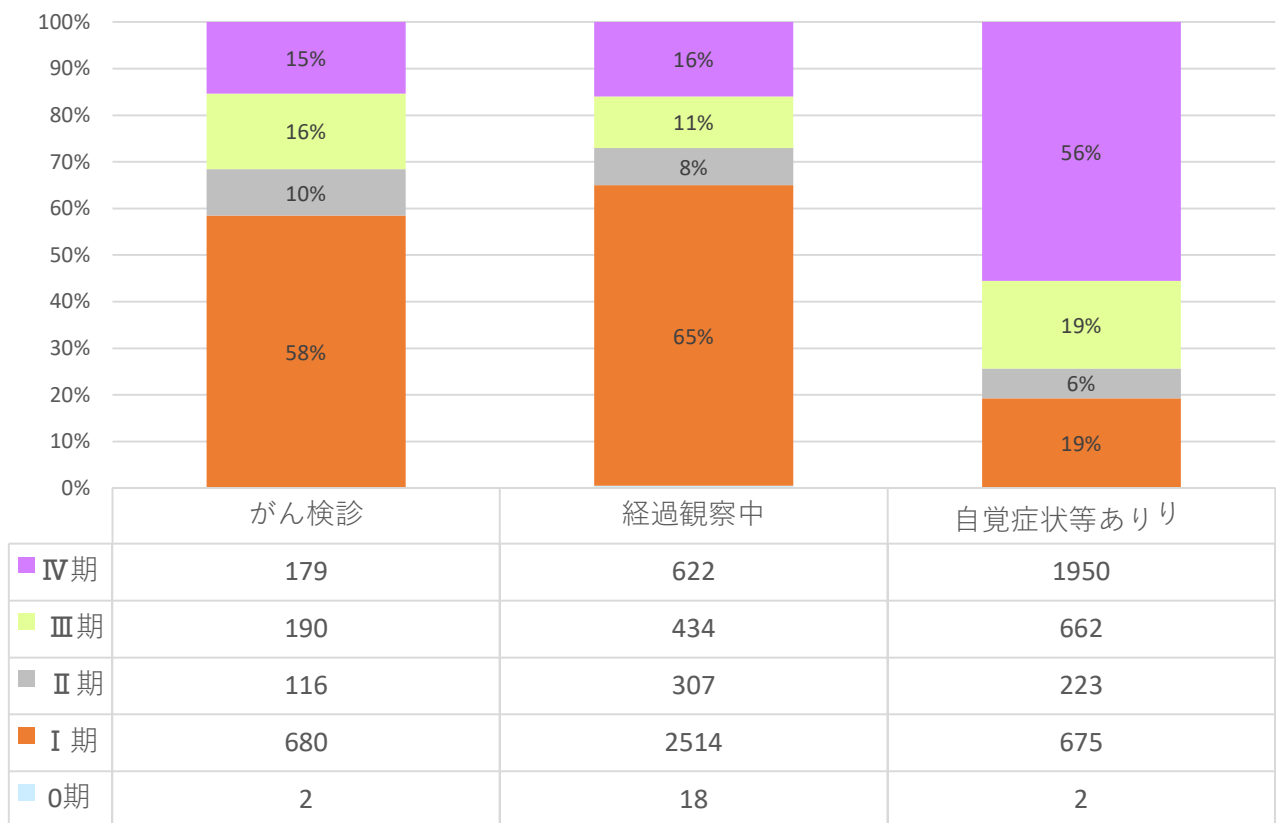
◎検診でみつける肺がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	2	680	116	190	179	1,167
経過観察中	18	2,514	307	434	622	3,895
自覚症状等あり	2	675	223	662	1,950	3,512
総計	22	3,869	646	1,286	2,751	8,574

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、肺がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例

自覚症状等あり・・・胸の痛み、咳、息切れ、声のかすれ等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例

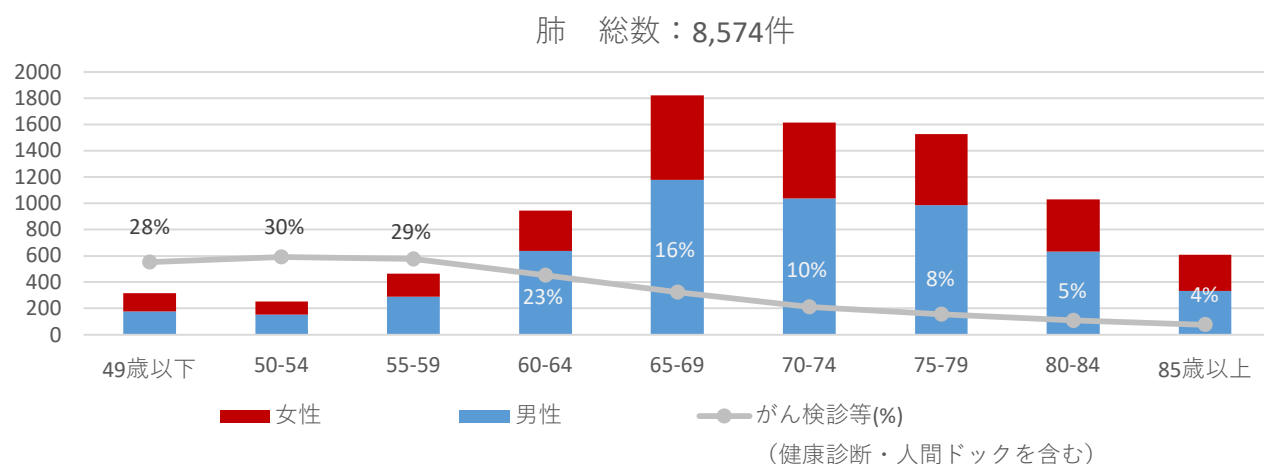


【解説】

3年間の対象症例数は8,574件で、がん検診での発見数は1,167件（14%）、経過観察中は最も多く3,895件（45%）、自覚症状等ありは3,512件（41%）であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期Ⅰ期が58%で、Ⅳ期が15%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期Ⅰ期が19%で、臨床病期Ⅳ期が56%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎肺がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



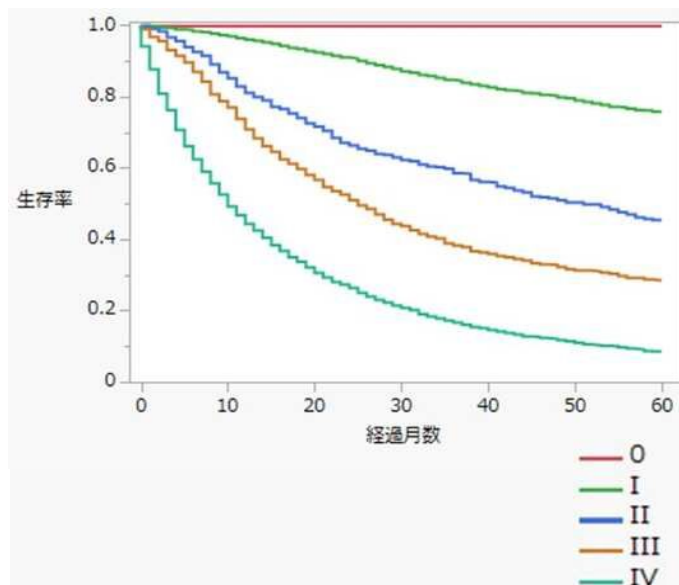
【解説】

発生数は、男性が5,416人、女性が3,158人と男性が女性の1.7倍多い。グラフをみると、年齢階層では60歳代前半から急速に増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代前半の30%をピークに減少し始め、60歳代後半からは16%となり発生数の増加と反対に減少している。

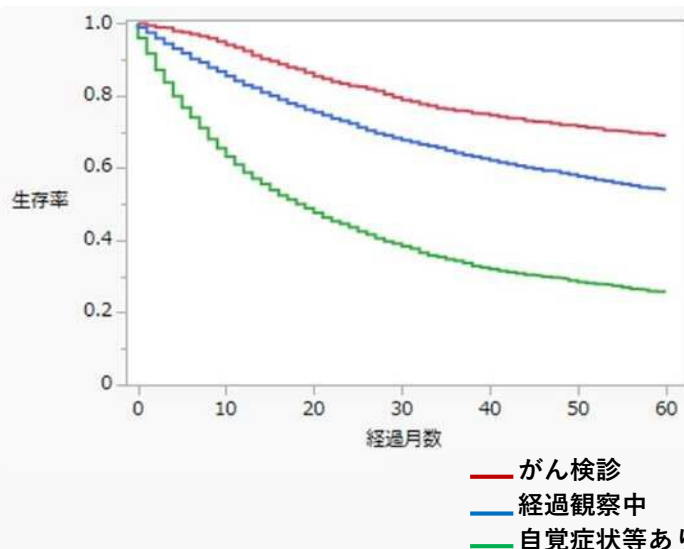
◎5年生存率 【集計対象数】

	0	I	II	III	IV	合計
がん検診	2	606	98	165	152	1,023
経過観察中	14	2,065	252	355	539	3,225
自覚症状あり等	2	563	188	567	1,663	2,983
合計	18	3,234	538	1,087	2,354	7,231

[臨床病期別]



[発見経緯別]



【解説】

肺がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合は約70%と明らかに生存率が高く、自覚症状等ありの場合は約25%程度という結果であった。

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【乳腺】

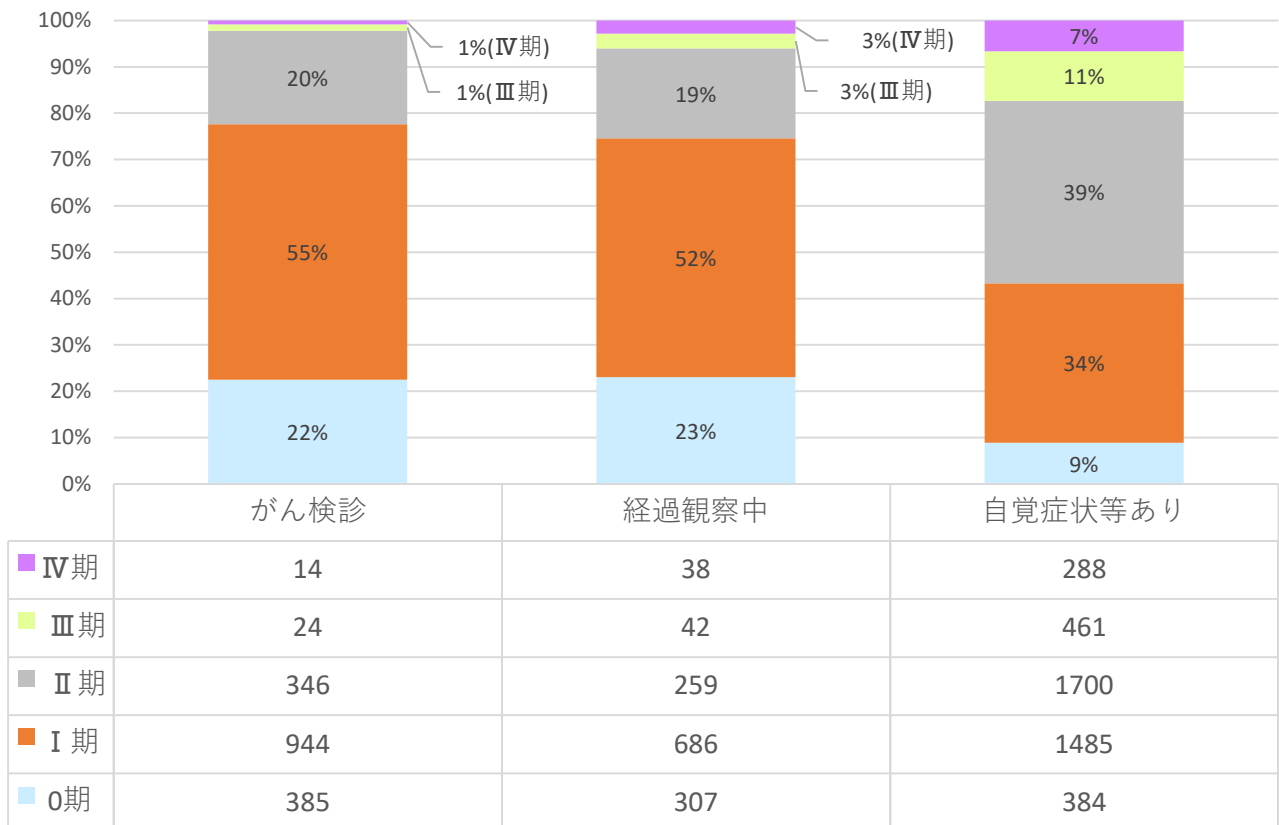
◎検診でみつかる乳がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	385	944	346	24	14	1,713
経過観察中	307	686	259	42	38	1,332
自覚症状等あり	384	1,485	1,700	461	288	4,318
総計	1,076	3,115	2,305	527	340	7,363

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、乳がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例

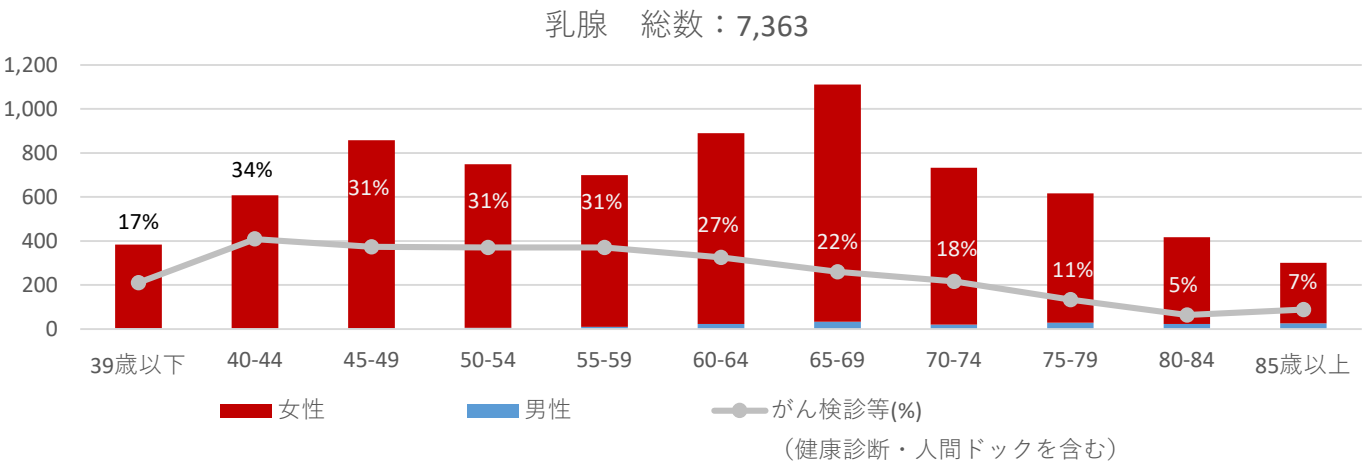
自覚症状等あり・・・しこりや乳房にえくぼやただれ等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は7,363件で、がん検診での発見数は1,713件（23%）、経過観察中での発見数は1,332件（18%）、自覚症状等ありでの発見数は最も多く4,318件（59%）であった。がん検診で発見された場合、臨床病期0期・I期で78%、IV期が1%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期0期・I期が43%、IV期が7%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎乳がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



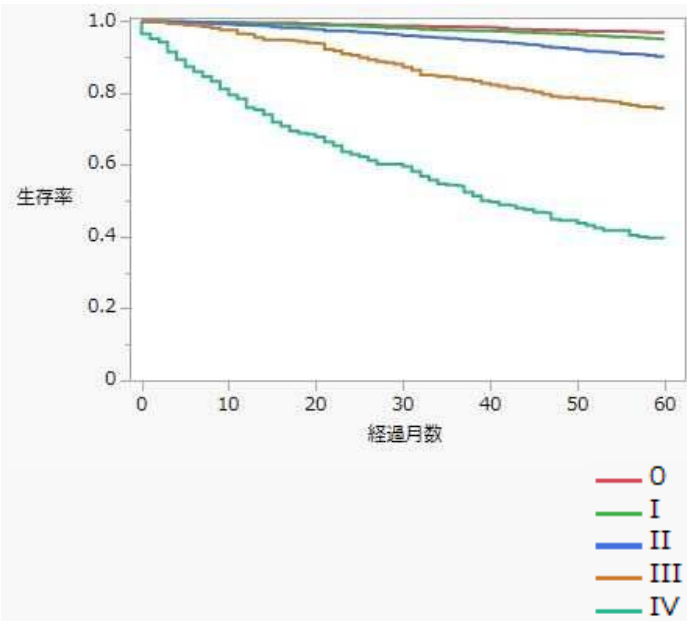
【解説】

発生数は、男性が174人、女性が7,189人と98%が女性となっている。グラフを見ると、年齢階層では40歳代前半から増加傾向である。一方、がん検診による発見率は、40代前半から60歳代前半まで30%近くで推移しているが、60歳代後半からは、徐々に減少している。

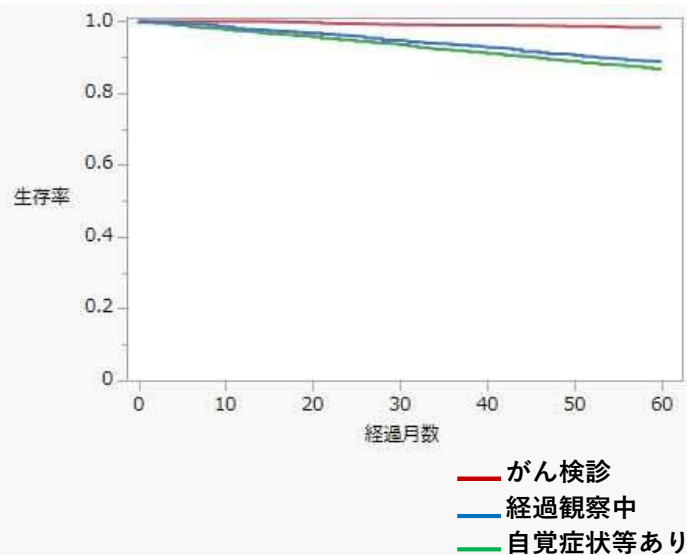
◎5年生存率 【集計対象数】

	0	I	II	III	IV	合計
がん検診	330	798	304	24	13	1,469
経過観察中	259	585	213	41	31	1,129
自覚症状等あり	333	1,263	1,439	398	248	3,681
合計	922	2,646	1,956	463	292	6,279

[臨床病期別]



[発見経緯別]



【解説】

乳がんの5年生存率をみると、臨床病期0期からⅡ期では90%程度と高い。発見経緯別では、どれも85%以上程度との結果であるが、がん検診で発見された場合、約98%と非常に高い生存率であった。

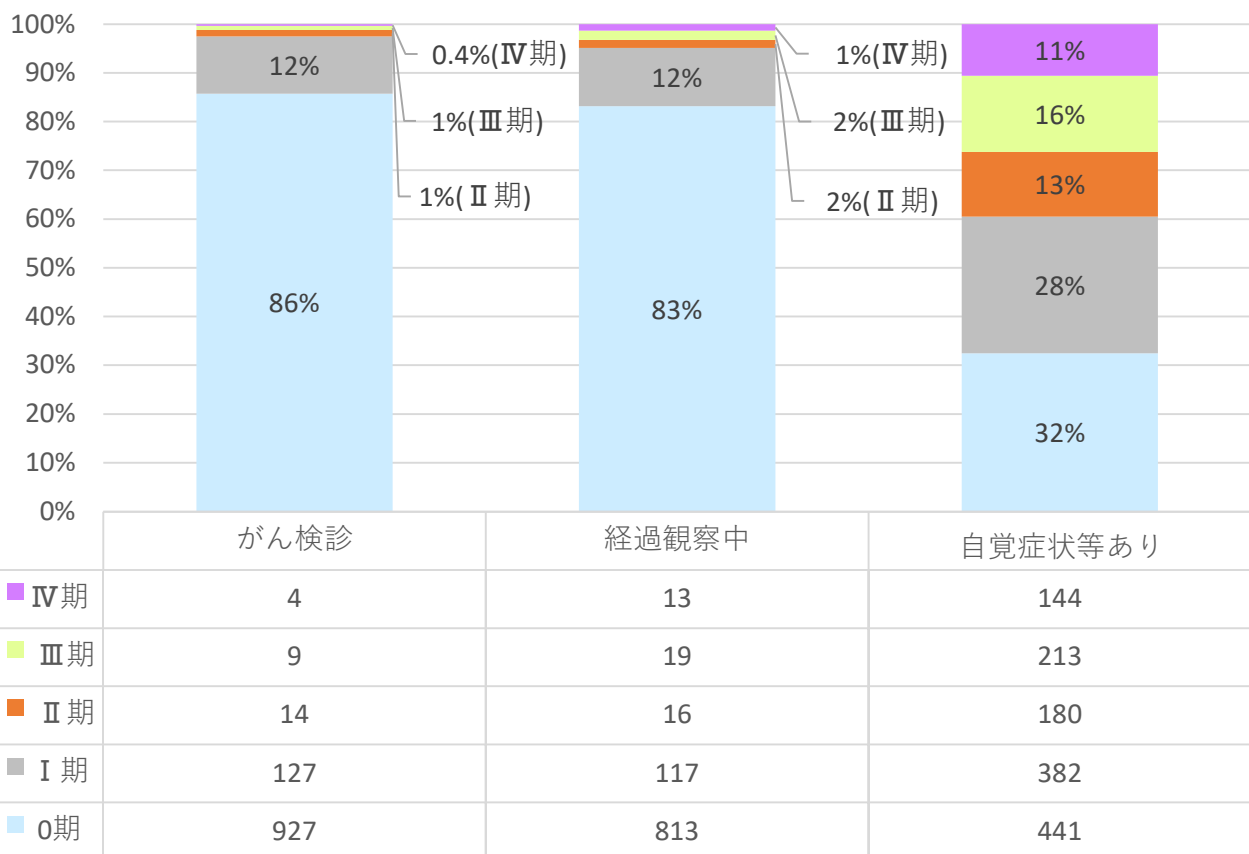
福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【子宮頸部】

◎検診でみつかる子宮頸がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	927	127	14	9	4	1,081
経過観察中	813	117	16	19	13	978
自覚症状等あり	441	382	180	213	144	1,360
総計	2,181	626	210	241	161	3,419

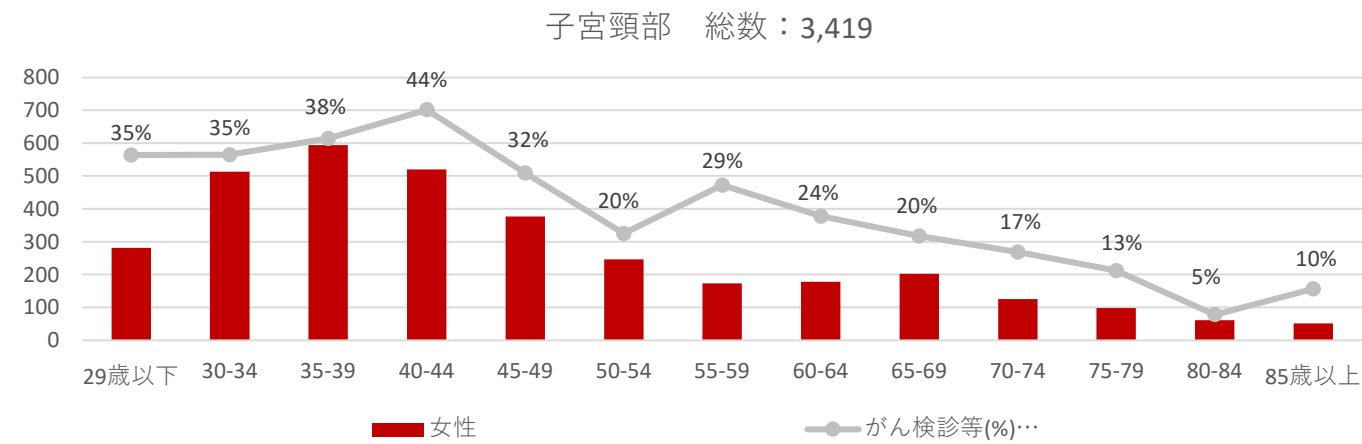
※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、子宮頸がんが検診で見つかった症例
経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例
自覚症状等あり・・・不正性器出血やおりものの増加等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は3,419件で、がん検診での発見数は1,081件（32%）、経過観察中での発見数は978件（29%）、自覚症状等ありでの発見数は最も多く1,360件（40%）であった。がん検診で発見された場合、臨床病期0期・I期で98%、IV期が0.4%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期0期・I期が60%、IV期が11%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが非常に多く発見されていることが確認された。

◎子宮頸がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



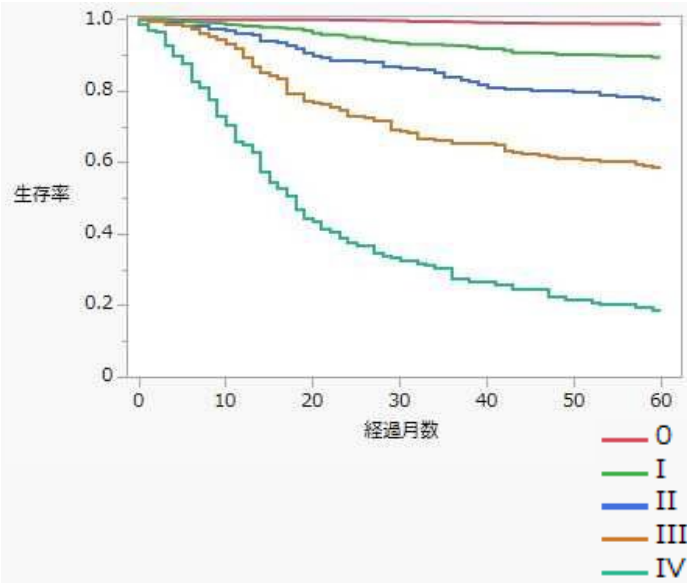
【解説】

グラフを見ると、年齢階層では30歳代前半から増加しており、30歳代後半がピークとなっている。がん検診による発見率は、29歳以下から30歳代後半で35%～38%、40歳代前半の44%となっており、発生数の多い年代のがん検診による発見の割合が比較的高い。また、50歳代以降は20%台から徐々に減少傾向である。

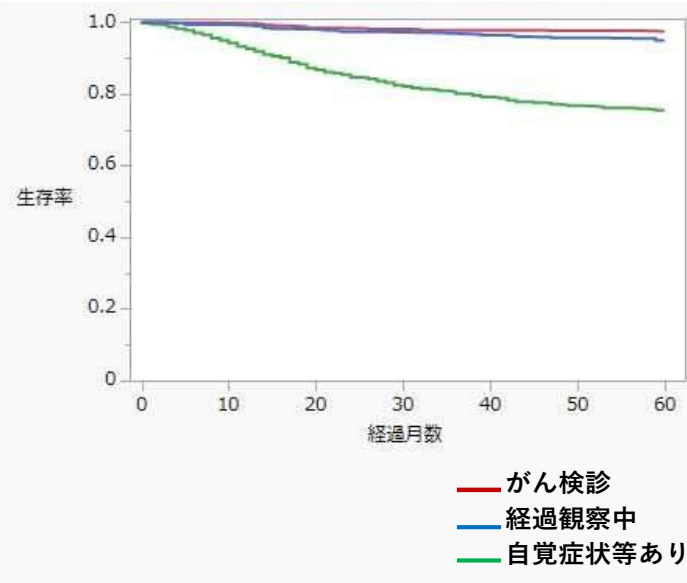
◎5年生存率 【集計対象数】

	0	I	II	III	IV	合計
がん検診	510	98	14	9	4	635
経過観察中	537	103	15	15	9	679
自覚症状等あり	281	335	162	187	125	1090
合計	1328	536	191	211	138	2404

[臨床病期別]



[発見経緯別]



【解説】

子宮頸がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合と経過観察中で発見された場合の生存率は同等で、自覚症状等ありと比べると良好な結果であった。

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【前立腺】

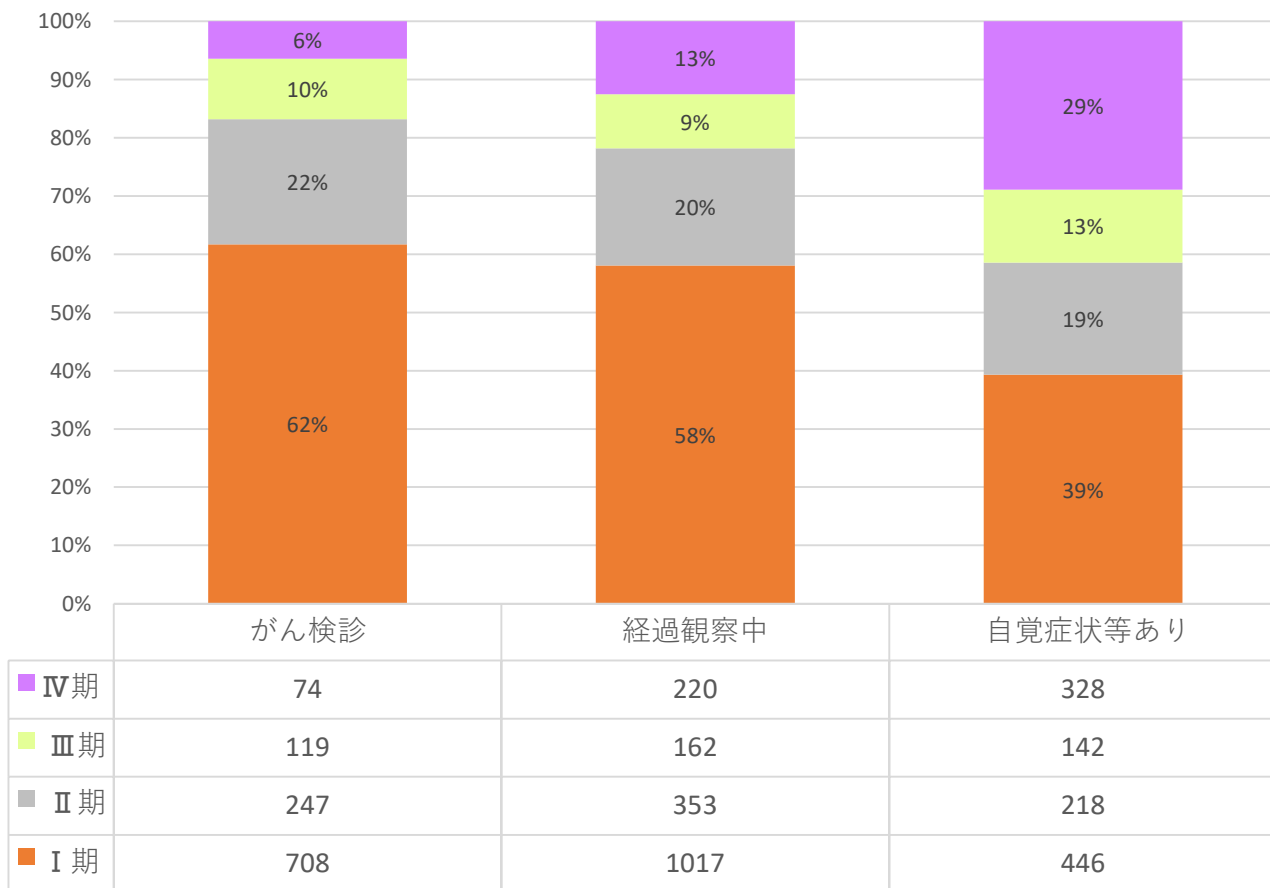
◎検診でみつける前立腺がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	708	247	119	74	1,148
経過観察中	1,017	353	162	220	1,752
自覚症状等あり	446	218	142	328	1,134
総計	2,171	818	423	622	4,034

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、前立腺がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例

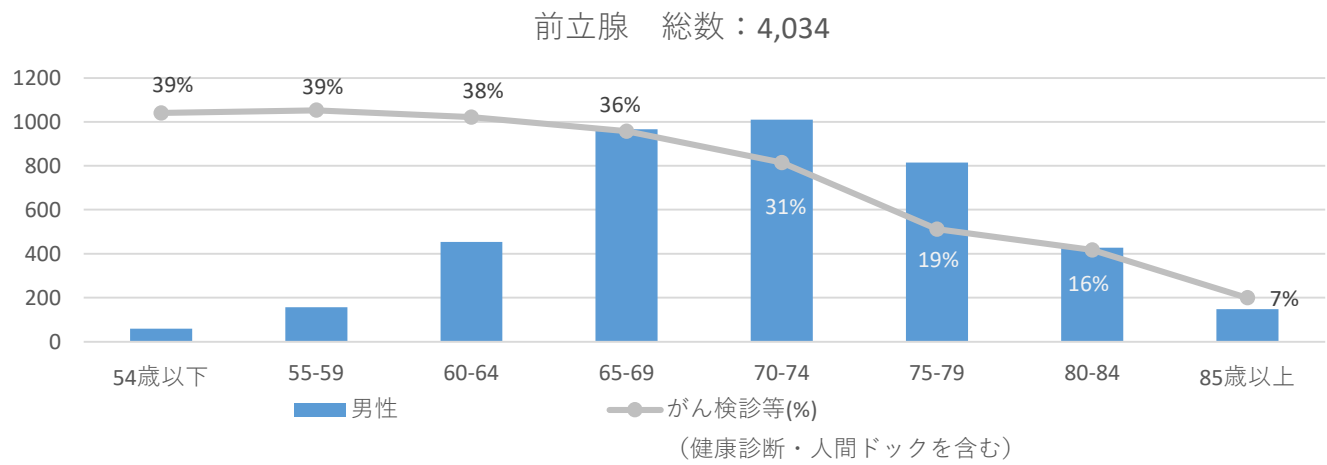
自覚症状等あり・・・排尿の回数が多い、尿が出にくい等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は4,034件で、がん検診での発見数は1,148件（28%）、経過観察中での発見数は最も多く1,752件（43%）、自覚症状等ありでの発見数は1,134件（28%）であった。がん検診で発見された場合、臨床病期Ⅰ期・Ⅱ期が84%で、Ⅳ期が6%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期Ⅰ期・Ⅱ期が58%で、臨床病期Ⅳ期が29%であり、がん検診で発見された場合、進行期のがんが少ないことが確認された。

◎前立腺がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



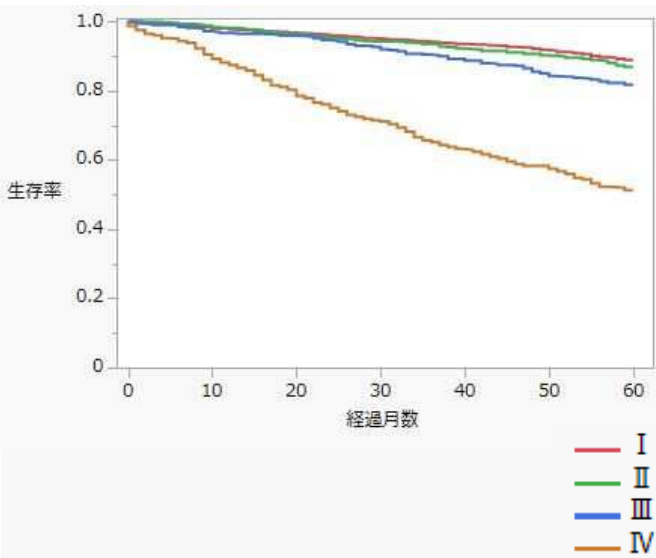
【解説】

グラフを見ると、発生数は年齢階層では60歳代前半から増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代後半の39%をピークに緩やかに減少し、70歳代後半からは19%以下へと減少している。しかし、がん検診率とは反対に発生数は60歳代後半～70歳代後半で多くなっている。

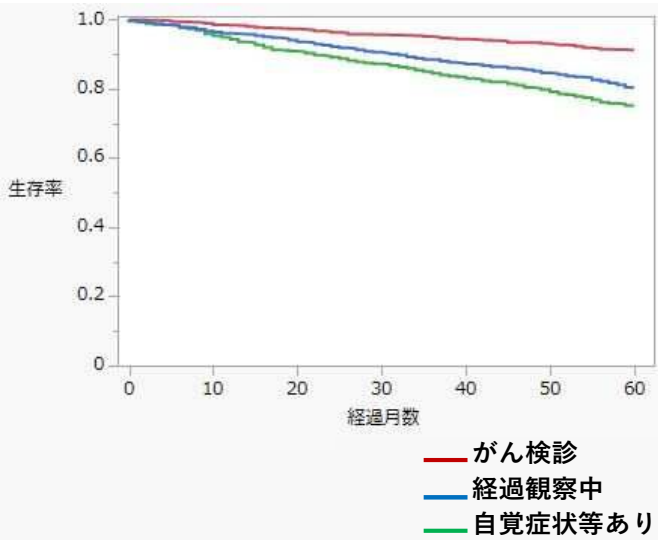
◎5年生存率 【集計対象数】

	I	II	III	IV	合計
がん検診	690	241	112	72	1115
経過観察中	941	335	151	199	1626
自覚症状等あり	419	209	138	298	1064
合計	2050	785	401	569	3805

〔臨床病期別〕



〔発見経緯別〕



【解説】

前立腺がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では他のがん腫に比べ自覚症状等ありの群でも生存率は80%近くあるが、がん検診で発見された場合は90%以上と高い結果であった。

福岡県がん診療連携協議会 院内がん登録解析 参加施設一覧

地区	病院名
<福岡ブロック>	九州大学病院
	九州がんセンター
	九州医療センター
	済生会福岡総合病院
	福岡大学病院
	福岡東医療センター
	浜の町病院
<筑後ブロック>	久留米大学病院
	聖マリア病院
	公立八女総合病院
	大牟田市立病院
<筑豊ブロック>	飯塚病院
	社会保険田川病院
<北九州ブロック>	北九州市立医療センター
	JCHO九州病院
	産業医科大学病院
	戸畑共立病院
<行政>	福岡県保健医療介護部 がん感染症疾病対策課